

飲酒を規定する心理学的要因の検討

—— 飲酒効果の期待，飲酒に対する態度と主観的規範 ——

金 地 美 知 彦

問題・目的

古来より，酒はごく日常的に人々によって親しまれている嗜好品である。宴会，定例の飲み会，行事の後の打ち上げなどは日常の行事となり，また何か祝い事があったときや親しい友人が集まったときも自然と酒を飲むことになる。一日の終わりに晩酌をする人も多い。町には，至る所に酒屋があり，また酒（ビール）の自動販売機も多く，スーパーやドラッグストア，コンビニでも酒が売られており，人々は気軽に酒を手に入れることが出来る。そして歓楽街には飲み屋がひしめいており，夜になると非常に盛況になる。

このように，日常的に人々に親しまれている酒であるが，人々の飲酒スタイルは人によって様々である。ほぼ毎日のように飲酒する人もいれば，酒をほとんど飲まない人もいる。また家で飲酒することが多い人もいれば，友人や同僚と一緒に飲み屋で飲酒することが多い人もいる。そして，飲酒量にしても個人差があり，浴びるように酒を飲む人もいれば，申し訳のようにしか酒を飲まない人もいる。さてこのような飲酒スタイルの差はどこから生まれてくるのだろうか。その要因としては，酒に対する体質といった生理的要因や，宗教等の文化的要因も考えられるが，心理学的要因としては「飲酒効果への期待」^{1,2)}など，「飲酒についての態度(評価，感情)」³⁾など等が過去の研究において指摘されている。

「飲酒効果への期待(alcohol outcome expect-

tancy)」とは，飲酒することによってどのような効果が感情や行動に現れると人々が認識しているかということを示すものである^{1,2)}など。この飲酒効果の期待については，過去に多くの研究において飲酒に手を染めること(initiation)や，飲酒の習慣化(maintenance)との関わりが指摘されている^{1,4-6)}。それと同時に，個人の飲酒をしたいという意図，飲酒量を規定する要因としても大きな役割を果たしていると考えられている⁷⁾など。飲酒効果の期待については，Leigh & Stacy(1993)⁸⁾は飲酒の望ましい効果(ポジティブな効果)の期待(「社会的行動の促進」「気分の高揚・楽しみ・快感」「性的欲求の促進」「負の強化(緊張緩和・ストレスコーピング)」)だけではなく，望ましくない効果(ネガティブな効果)の期待(「社会的行動のコントロール低下」「感情・気分の悪化」「体調の悪化」「認知・行動のコントロール低下)についても考慮することが必要であると述べている。ポジティブな効果の期待については飲酒量，飲酒頻度を規定する重要な要因であり，ポジティブな期待が大きい人ほど多量の飲酒をする傾向があり，飲酒頻度が多くなるということが多数の研究によって証明されている⁷⁻¹¹⁾ほか。一方，ネガティブな効果の期待については，期待が大きい人ほど飲酒量，飲酒頻度が少ないことを報告している研究^{8,11,12)}がある一方で，ネガティブな効果の期待と飲酒頻度は無関係であると主張する研究(Stacy and Wideman, 1987—cited from Leigh, 1989²⁾)も存在する。

一方，「飲酒についての態度(評価，感情)」と

は、飲酒という行為に対する良い－悪い、好き－嫌い、賛成－反対といった評価的反応のことである^{13,14)}。飲酒行動と態度との関係を調べた研究は数多くあり、ほとんどの研究においてポジティブな態度を持っている人ほど飲酒頻度や飲酒量が多くなるという結果が見られている^{3,7,15,16)}など。Simons & Carey (1998)¹⁷⁾は飲酒についての態度の測定を「感情」成分(例:うれしくなる/悲しくなる, リラックスする/怒りっぽくなる), 「認知」成分(例: 有益な/有害な, 健康によい/健康に悪い) および「全体的な(global)評価」(例: 好き/嫌い, 良い/悪い, 望ましい/望ましくない)の3つに分けて測定, それぞれ飲酒行動との関わりを見出している。

以上, 飲酒についての「期待」と「態度」について述べてきたが, この期待と態度という二つの要因を統合し, 行動を予測したモデルとして, Ajzen & Fishbein (1980)¹³⁾によって提唱された Theory of Reasoned Action (熟考行為モデル: TRA モデル) があげられる。TRA モデルにおいては, 態度を規定する要因として, 行動の結果についてのペリーフ(ある結果が起こる主観的確率)とその結果についての評価の存在が仮定されており, ここで言う「ペリーフ」と飲酒行動の研究における「期待」とは, ほぼ同一の概念ではないかと考えられている。そして, 行動の結果についてポジティブに期待されているほど, 行動に対してポジティブな態度が形成されると考えられている。また, 期待と態度の統合以外における TRA モデルの特徴としては, 行動を予測する要因として主観的規範(subjective norm)を導入したことがあげられる。主観的規範とは, 自分にとって重要な他者(例: 家族, 親友, 職場の同僚)がその行為をすることについてどのように考えていると認識しているか, ということである。飲酒行動の研究においては, 家族および友人の規範と飲酒行動の関係について研究が行われており, 自分が酒を飲むことについて家族や友人が望ましいと思っていないと認識しているほど, 酒を飲む頻度や飲酒

量が少ないという傾向が見られている¹⁸⁾。また, 友人関係の中での飲酒に対する特殊な規範意識が, 飲酒への社会的強化につながり, 酒を飲む頻度や飲酒量が多くなるという, 規範が飲酒量を増やす傾向も見られている¹⁹⁾。本研究は, TRA モデルを用いて大学生の飲酒行動, 飲酒習慣が予測可能であるかどうか, またどのように予測できるかを調べることを目的とする。TRA モデルを用いて飲酒行動の予測を行った研究は, 我が国ではまだ存在しないと思われるが, 外国での先行研究としては, Stacy, Widaman, & Marlatt (1990)¹¹⁾による研究がある。Stacy, et al. (1990)¹¹⁾は, 飲酒効果への期待(ポジティブ, ネガティブ)と飲酒への態度によって今後1年間の飲酒行動がどの程度予測できるかを調べるために, TRA モデルに基づいて調査を行い, 飲酒への意図は「ポジティブな効果の期待」と「過去の飲酒行動」によって大きく規定され, 「態度」と「ネガティブな効果の期待」からはあまり大きくは規定されていないという結果を導き出した。しかし, 彼らの研究には一つ問題点があるように思われる。それは, ネガティブな期待をひとくくりにして扱っていることである。Leigh & Stacy (1993)⁸⁾はネガティブな期待を4つのカテゴリーに分けて考えているが, その中には「社会的行動のコントロール低下」期待や「認知・行動のコントロール低下」期待のように, ある飲酒者にとって, もしくはある状況においては, ポジティブな期待にもなり得る期待もあれば, 「感情・気分の悪化」期待や「体調の悪化」期待のように, ほとんどすべての人が同じようにネガティブに捉えている期待も存在する。このような二種類のネガティブな期待をひとくくりにして変数として扱うのは, 期待の意図, 行動への影響の正確な測定を妨げるのではないかと思われる。本研究では, ネガティブな期待に限らず, ポジティブな期待をも含めて, 因子分析を行い, それぞれの期待ごとにどのように態度, 意図を予測しているかを測るつもりである。また, 彼

らの研究では、態度よりもポジティブな期待によって飲酒意図がより大きく有効に予測されるという結果が出ているが、同じく TPO モデル (TRA モデルの改良版) に基づいて、態度と期待から意図を予測した Wall, Hinson, & McKee (1998)²⁰⁾ の研究では、期待よりも態度によって飲酒意図が大きく予測されるという逆の結果になっている。本研究では、態度と期待のどちらによって行動の意図がより大きく予測されるかについても注目する。

本研究では、TRA モデルに基づいて、図 1 のモデルを仮定した。変数の中に、「友人/両親から飲酒に誘われる頻度」があるが、これは飲酒を促進させる規範の程度を測る変数である。このモデルには、次のような仮説が含まれている。

- ① ポジティブな期待は飲酒へのポジティブな態度につながり、ネガティブな期待は飲酒へのネガティブな態度につながるであろう。また、ポジティブな期待は飲酒意図を高め、飲酒頻度、飲酒量を増やす可能性があり、ネガティブな期待は飲酒意図を弱め、飲酒頻度、飲酒量を減らす可能性がある。
- ② 飲酒へのポジティブな態度は飲酒意図を高め、飲酒へのネガティブな態度は飲酒意図を弱めるだろう。
- ③ 主観的な規範は飲酒意図の増減に影響するだろう。
- ④ 飲酒意図が高くなれば、飲酒量、飲酒頻

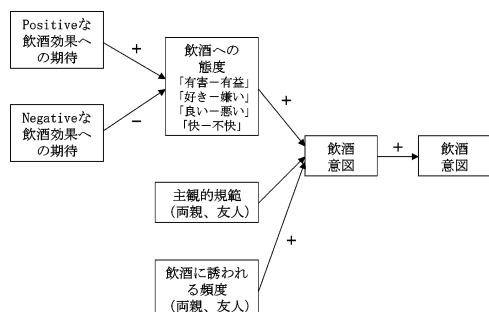


図 1. 仮定された飲酒行動予測モデルとその変数

度は増えるだろう。

さらに、本研究では対象となる飲酒行動を次の 2 種類に限定し、それぞれにおいて、TRA モデルに基づいて分析を行う。一つは、「家で一人で」酒を飲む行動であり、もう一つは、「友人と一緒に」酒を飲む行動である。このように、対象を二つの飲酒状況における飲酒行動に限定したのは、二つ理由がある。一つは、Ajzen & Fishbein (1980)¹³⁾ によれば、TRA モデルを行動の予測に適用する際は、その行動に関わる文脈を限定した方が予測の精度が上がるからである。Baumeister, Heatherton, & Tice (1994)²¹⁾ は、飲酒には社会的理由による飲酒と個人的理由による飲酒の大きく分けて二つのカテゴリーがあり、社会的理由による飲酒の中には規範による飲酒が含まれると述べている。このことから、個人的理由による飲酒のみが行われるであろう「家で一人で」状況での飲酒行動と、規範による圧力を含む社会的理由によって主に飲酒が行われるであろう「友人と一緒に」状況での飲酒行動とにそれぞれ分けて限定して調査を行うのは妥当であると思われる。もう一つの理由は、上記の理由とも一部重なるが、調査対象者となる大学生の中には、社会的な場面では酒を飲むにも関わらず、家では酒を飲む習慣がない人がかなりの割合にいることが予想されるからである。本研究では、家で酒を飲む習慣の有る/無しはどのような要因によって規定されているか、また家で酒を飲む習慣のある人とない人では「友人と一緒に」酒を飲む行動においてどのような違いが見られるかということについても注目していきたい。

方 法

対象者と手続き 大学生・大学院生 105 名(うち、男 49 名、女 56 名)を対象に、質問紙調査を行った。対象者の年齢は、19 歳から 28 歳の間に位置し、平均年齢は 21.4 歳であった。

質問紙の構成 質問紙は以下に示す構成に

なっている。

① 飲酒の効果(結果)の期待と評価の評定——飲酒後の気分,意識,行動の状態について記述した65項目(Leigh & Stacy, 1993⁸⁾, 桜井, 1997¹⁰⁾より採用)のそれぞれにつき,「酒を飲むとどのくらいの割合でそのような状態になると思うか(期待,主観的確率)(全くならない~確実になる)」、「そのような状態は望ましいものであるかどうか(評価)(非常に望ましくない~非常に望ましい)」の二つの質問に回答してもらった。

② 飲酒についての態度の評定——酒を飲むことについてどのように思っているかについて,7種類の形容詞対(有害だ-有益だ,嫌いだ-好きだ,悪い-良い,不快だ-快い,不愉快だ-愉快だ(楽しい),うんざりした(退屈な)-おもしろい,いやだ-よかった)を用いて,7段階尺度(例:非常に有害だ~非常に有益だ)で評定してもらった。質問は,「家で一人で」「友人と一緒に」の2つの状況での飲酒について行った。

③ 飲酒についての他者の規範の評定——上記の2つの状況での飲酒を回答者がすることについて,回答者の両親,友人はそれぞれどのように思っているかを評定してもらった。評定には,二つの7段階尺度(望ましくない~望ましい,飲むべきでない~飲むべきだ)を使用し

た。さらに,友人の中での酒の好きな人の割合(まったくいない~ほとんど全員),友人から酒を一緒に飲もうと誘われる頻度(まったくない~ほとんど毎日),両親の家で酒を飲む習慣の有無,両親から酒を一緒に飲もうと誘われる頻度(まったくない~ほとんど毎日)について回答してもらった。

④ 飲酒状況についての質問——過去3ヶ月間に,上記の2つの状況での飲酒をしたと思った頻度(飲酒意図),した頻度(飲酒頻度)を回答してもらった(まったくない~ほぼ毎日)。また,家で一人で酒を飲むときと,友人と一緒に酒を飲むときの一回あたりの平均飲酒量と一回あたりの最大飲酒量をそれぞれ回答してもらった。また,酒を何杯まで飲めるか(摂取限度量)を回答してもらった。

飲酒量は栗原(1992)²²⁾に準拠し,すべてビール(350ml)の本数に換算して回答してもらった。

結 果

回答者の飲酒状況 回答者の飲酒状況(飲酒頻度,飲酒量)を表1,表2に示す。家で一人で酒を飲む習慣のない人が53名(男性:19名,女性:34名)と約半数を占めていた(女性では半数以上)。それぞれの状況での平均飲酒量は,

表1. 回答者の飲酒頻度(過去3ヶ月間)
(左-家で一人で,右-友人と一緒に)

飲酒頻度	全体(人)	男性(人)	女性(人)	飲酒頻度	全体(人)	男性(人)	女性(人)
まったくない	53	19	34	まったくない	7	3	4
3ヶ月に1~2回	22	11	11	3ヶ月に1~2回	29	10	19
月に1回	12	5	7	月に1回	28	13	15
月に2~3回	5	3	2	月に2~3回	34	18	16
週に1回	4	3	1	週に1回	7	5	2
週に2~3回	6	5	1				
週に4~5回	0	0	0	合 計	105	49	56
ほとんど毎日	3	3	0				
合 計	105	49	56				

表2. 回答者の1回あたりの平均飲酒量（過去3ヶ月間）
（左—家で一人で、右—友人と一緒に）

平均飲酒量	全体 (人)	男性 (人)	女性 (人)	平均飲酒量	全体 (人)	男性 (人)	女性 (人)
0 杯	51	18	33	0 杯	8	3	5
1 杯	30	15	15	1 杯	11	3	8
2 杯	13	6	7	2 杯	16	6	10
3 杯	6	6	0	3 杯	18	5	13
4 杯	1	1	0	4 杯	8	3	5
5 杯	3	2	1	5 杯	18	9	9
6 杯	1	1	0	6 杯	12	11	1
合計	105	49	56	7 杯	5	3	2
				8 杯	5	3	2
				10 杯	3	3	0
				20 杯	1	0	1
				合計	105	49	56

「家で一人で」状況では0.94杯（0杯の回答者をのぞく：1.83杯）、「友人と一緒に」状況では、3.24杯（0杯の回答者をのぞく：4.26杯）であった。

飲酒効果の期待の因子分析 飲酒効果の期待の評定に用いた65項目のうち、フロア効果の見られた10項目を除き、残りの55項目を用いて因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、その結果5因子を抽出した。累積寄与率は、46.61%であった。さらに、各因子に高い負荷量を示す項目を上位5項目ずつ選び、全25項目で再度因子分析を行った。結果は表3に示す。第1因子は、「陽気になる」「楽しい気分になる」といったいい気分になる効果を表す項目や、「開放的になる」「より社交的になる」といった社交促進効果を表している項目が高く負荷していることから、「いい気分・社交促進期待」因子と命名した。第2因子は、「性欲が高まる」「異性への関心が高まる」など異性への興味を高める効果を表している項目が高く負荷していることから、「異性関心促進期待」因子と命名した。第3因子は、「心がなごむ」といったリラックス効果を表している項目や、「沈んだ気持ちを慰めてくれる」「不快な気分がやわらぐ」「ストレスがやわらぐ」など、望ましくない状況を改善する効

果を表している項目が高く負荷していることから、「ストレス解消期待」因子と命名した。第4因子は、「体調が悪くなる」「頭痛がする」「健康を害する」など体調の悪化効果を表している項目や、「気持ちが悪くなる」といった体調の悪化に加え気分の悪化をも伴う項目が高く負荷していることから、「体調・気分悪化期待」因子と命名した。第5因子は、「人にかからむ」「愚痴を言う」「人に迷惑をかける」「攻撃的になる」といった攻撃的な態度を誘発する効果を表している項目が高く負荷していることから「攻撃性増大期待」因子と命名した。表2.2にあるとおり、累積寄与率は初期の因子分析よりもかなり高い57.44%となった。

次に、Fishbein & Ajzen (1975)²³⁾の期待値理論や期待効用理論に基づき、各因子の上位5項目において、それぞれ期待の評定値（0～5）と評価の評定値（-1～1）を掛け合わせ、期待効用（＝期待×評価）を算出した。そして、各因子ごとに、上位5項目の期待効用値を平均し、算出した平均値を各因子の期待効用の代表値とした。記述統計を取ったところ（表4）、第1因子（いい気分・社交促進）と第3因子（ストレス解消）の期待においてはほとんどの人がポジティブな評価を持っていることがわかり、一方、

表3. 飲酒効果への期待の因子分析結果（主因子法，バリマックス回転）

	因子1 いい気分・ 社交促進期待	因子2 異性関心 促進期待	因子3 ストレス 解消期待	因子4 体調・気分 悪化期待	因子5 攻撃性 増大期待
・陽気になる	0.751	0.169	0.288	0.061	0.114
・楽しい気分になる	0.747	0.148	0.337	-0.145	0.163
・気持ちが高くなる	0.710	0.187	0.249	0.084	0.087
・開放的になる	0.672	0.200	0.198	-0.042	0.221
・より社交的になる	0.645	0.365	0.387	0.042	0.045
・性欲が高まる	0.099	0.852	0.070	0.193	0.071
・異性への関心が高まる	0.149	0.758	0.125	0.056	0.176
・いやらしくなる	0.092	0.737	0.152	0.138	0.092
・異性に対して大胆になる	0.249	0.665	0.129	0.074	0.188
・異性に触れたいくなる	0.189	0.627	0.041	0.143	0.238
・心がなごむ	0.442	0.070	0.660	0.056	-0.037
・沈んだ気持ちを慰めてくれる	0.444	0.111	0.631	-0.068	0.061
・不快な気分がやわらぐ	0.533	0.171	0.627	-0.061	0.033
・ストレスがやわらぐ	0.383	0.059	0.607	-0.114	0.179
・体調がよくなる	-0.001	0.093	0.578	-0.028	0.158
・体調が悪くなる	0.114	0.066	-0.019	0.791	0.096
・気持ちが悪くなる	0.101	0.050	-0.078	0.653	0.189
・頭痛がする	-0.021	0.013	-0.135	0.635	0.011
・健康を害する	-0.134	0.203	0.209	0.612	0.133
・疲れる	-0.095	0.204	-0.022	0.593	0.021
・人からむ	0.240	0.033	-0.034	-0.122	0.730
・愚痴を言う	-0.025	0.196	0.160	0.167	0.710
・人に迷惑をかける	-0.062	0.131	0.230	0.260	0.618
・攻撃的になる	0.033	0.233	0.116	0.038	0.607
・大声で騒ぐ	0.263	0.040	-0.026	0.227	0.532
固有値	3.638	3.199	2.601	2.490	2.431
寄与率 (%)	14.550	12.797	10.404	9.961	9.724
累積寄与率 (%)	14.550	27.347	37.752	47.713	57.437

表4. 期待各因子の効用（期待×評価）の記述統計

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
因子1（いい気分・社交促進）	-1.00	5.00	2.68	1.36
因子2（異性関心促進）	-3.40	3.60	-0.18	1.25
因子3（ストレス解消）	-0.60	4.80	1.80	1.22
因子4（体調・気分悪化）	-5.00	0.40	-1.95	1.13
因子5（攻撃性増大）	-4.20	1.00	-1.26	1.03

表 5. 飲酒への態度の因子分析結果（主因子法）
（左—家で一人で、右—友人と一緒に）

態度項目	因子負荷量	態度項目	因子負荷量
不快だ—快い	0.898	不快だ—快い	0.943
いやだ—よかった	0.862	不愉快な—愉快的な	0.920
不愉快な—愉快的な	0.846	嫌い—好き	0.897
嫌い—好き	0.834	退屈だ—おもしろい	0.847
退屈だ—おもしろい	0.790	いやだ—よかった	0.805
良い—悪い	0.711	良い—悪い	0.789
有害だ—有益だ	0.642	有害だ—有益だ	0.734
固有値	4.504	固有値	5.069
寄与率(%)	64.348	寄与率(%)	72.418

第4因子（体調・気分悪化）と第5因子（攻撃性増大）の期待においてはほとんどの人がネガティブな評価を持っていることがわかった。第2因子（異性関心促進）の期待については、人によって評価に差があり、ポジティブな評価を持っている人もいれば、ネガティブな評価を持っている人もいることがわかった。

飲酒についての態度の因子分析 それぞれの状況ごとに（「家で一人で」「友達と一緒に」）、飲酒への態度の7項目を因子分析（主因子法）にかけた。その結果、どちらの状況においても、態度の7項目は1因子に収束した（表5）。それぞれ、因子得点を算出し、モデルの予測の際の態度の変数として使用した。

飲酒行動予測モデルにおいて仮定された因果関係の分析方法 飲酒行動が「飲酒意図」「飲酒についての態度」「飲酒効果の期待」「主観的規範」にどのように規定されているかを調べるために、仮定した飲酒行動予測モデル（図1）に従い、パス解析を行った。パス解析は、重回帰分析（ステップワイズ方式、有意水準—除去10%以上、投入15%以下）を繰り返し行うという方法を用いて行った。

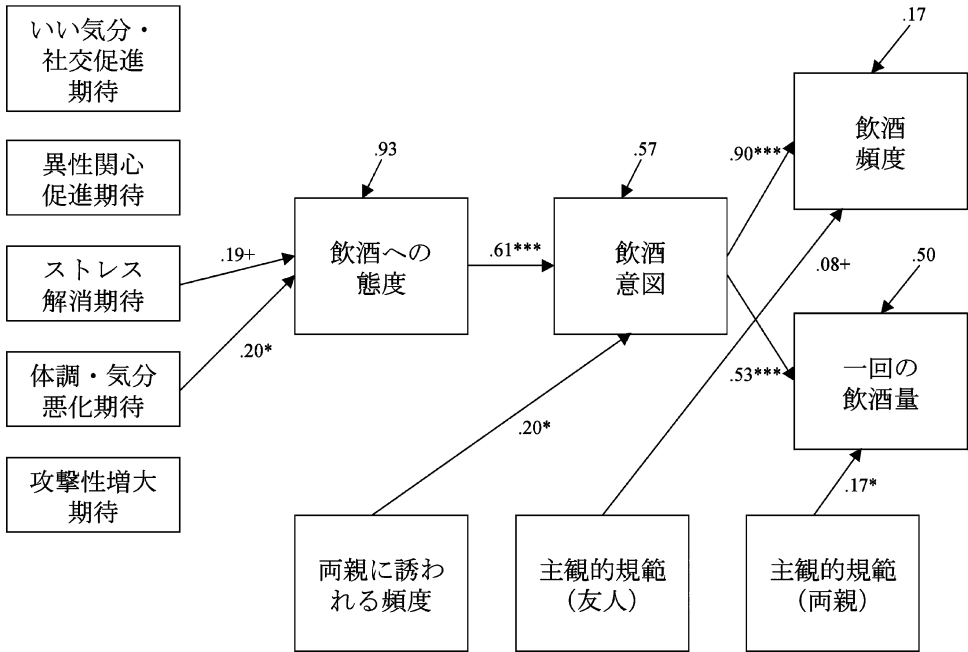
パス解析には、飲酒行動を表す変数として「飲酒頻度」、「一回の飲酒量」の回答値を、主観的規範を表す変数として「主観的規範（両親、友人）」「両親、友人に飲酒に誘われる頻度」の評

定値を用いた。飲酒についての態度の変数としては因子得点を使用し、飲酒効果の期待については各5因子において算出した期待効用値を用いた。

以上のパス解析を用いて、「家で一人で」「友人と一緒に」の2つの状況での飲酒行動について、それぞれ予測モデルの検証を行った。

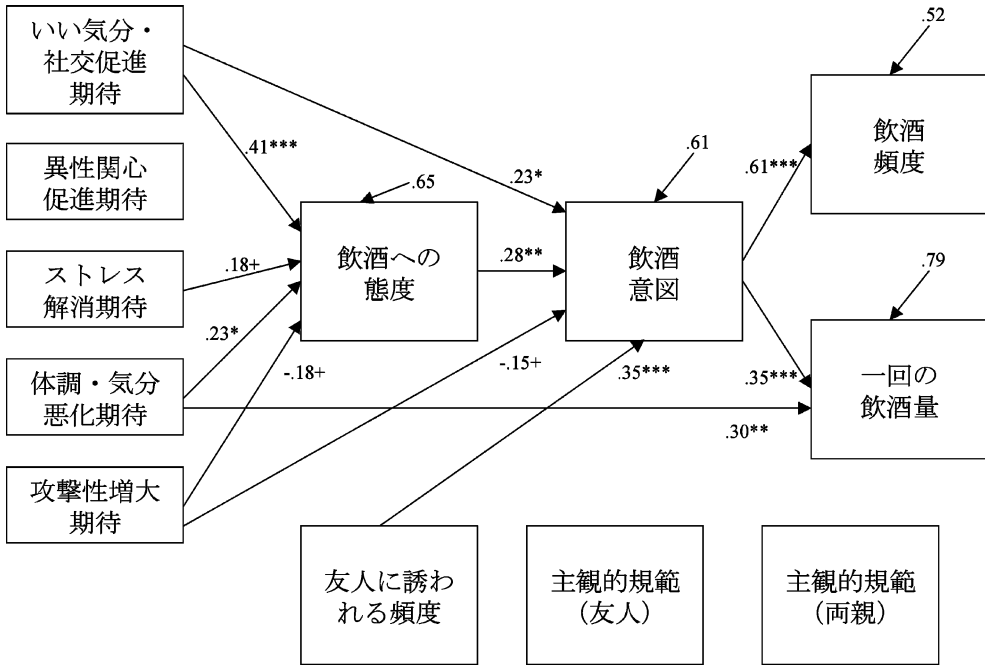
家で一人での飲酒行動の予測モデルの検証 パス解析の結果を図2に示す。飲酒への態度は、ストレス解消期待 ($p < 0.10$)、体調・気分悪化期待 ($p < 0.05$) によって規定され、飲酒意図は飲酒への態度 ($p < 0.001$)、両親に誘われる頻度 ($p < 0.05$) によって規定されているという結果が得られた。また飲酒頻度は飲酒意図 ($p < 0.001$) の他に友人の主観的規範によって ($p < 0.10$)、飲酒量は飲酒意図 ($p < 0.001$) の他に両親の主観的規範によって ($p < 0.05$) それぞれ規定されているという結果が得られた。

友人と一緒にでの飲酒行動の予測モデルの検証 パス解析の結果を図3に示す。飲酒への態度は、いい気分・社交促進期待 ($p < 0.001$)、ストレス解消期待 ($p < 0.10$)、体調・気分悪化期待 ($p < 0.01$)、攻撃性増大期待 ($p < 0.05$) によって規定され、飲酒意図は飲酒への態度 ($p < 0.01$)、友人に誘われる頻度 ($p < 0.001$) に加え、いい気分・社交促進期待 ($p < 0.05$)、攻撃性増大期待 ($p < 0.10$) によって規定されているという結果が得



+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

図2. 飲酒行動予測モデルのパス解析結果(家で一人で)



+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

図3. 飲酒行動予測モデルのパス解析結果(友人と一緒に)

られた。また飲酒頻度は飲酒意図 ($p < 0.001$) によって、飲酒量は飲酒意図 ($p < 0.001$) の他に体調・気分悪化期待によって ($p < 0.01$) それぞれ規定されているという結果が得られた。

考 察

「家で一人での飲酒行動」「友人と一緒に飲酒行動」のそれぞれを予測するために、TRA モデルに基づいて仮定した行動予測モデル (図 1) は、調査の結果それぞれほぼ支持されたと思われる。どちらの飲酒行動においても、飲酒頻度、一回あたりの飲酒量は飲酒意図によって規定されており、飲酒意図は態度、規範によって直接、また期待によって直接あるいは態度を通して間接的に規定されているというモデル通りの結果が見られた。

家で一人での飲酒行動の予測モデルの検証においては、飲酒への意図は飲酒への態度によって大きく規定され、そして飲酒への態度は5つの期待のうち「ストレス解消期待」と「体調・気分悪化期待」によって規定されていることが分かった。そして、飲酒意図、行動を直接規定している期待はなく、また、二つの期待と態度の間の因果関係もあまり強くないことが分かった。この調査の一つの目的として、態度と期待のどちらによって飲酒意図、飲酒行動がより大きく予測されるかということがあるが、家で一人での飲酒行動においては期待は飲酒意図の予測には必要なく、態度のみによって十分飲酒意図が予測できることが判明した。飲酒への態度の因子分析では感情的な側面を反映した形容詞対(「不快-快」「いやだ-よかった」「不愉快-愉快」「好き-嫌い」)が上位に来ていて、そのためこのモデルでの予測変数として用いた飲酒への態度の因子得点は主に態度の感情的な側面を反映しているものと思われる。そしてこのことは、飲酒意図は飲酒効果の期待といった認知的な要因(例：酒を飲むとストレスが発散される)よりも飲酒についての感情的な要因(態度

の感情的側面)(例：この酒はおいしい、この酒を飲むのは気持ちいい)によってより強く予測されうることを意味していると思われる。桜井(1997)¹⁰⁾は、日本の大学生を対象に飲酒理由を調査し、「いい気分になる」「ストレス解消になる」といった理由の他に「酒が好きだから」という飲酒理由によって多数の人が酒を飲んでることを発見した。そして、多量に飲酒する人のほとんどはこの「酒が好きだから」という理由で飲酒を行っていることを発見した。これは、本調査の結果と一致し、認知的な要因よりも感情的な要因によって飲酒行動がより強く規定されていることを示している。

両親、友人の主観的規範意識については、一回あたりの飲酒量、飲酒頻度をそれぞれ規定しているという結果が出ていた。両親の主観的規範については多少ネガティブに認識している人が多いと思われ(平均3.15, S.D. 1.25)、飲酒量を抑制する(もしくは飲み過ぎを防止する)役割を果たしていることが多いと思われる。また、両親に誘われる頻度が、飲酒意図を規定しているという結果が出ていた。両親に誘われる頻度が多いほど飲酒意図が高いという結果が出たのは、両親が家で飲酒を誘う行為が、家では酒を飲むべきだ(または、家で酒を飲むのは悪いことではない)という規範意識を表しているからではないかと思われる。しかし、規範は態度と比較すると、飲酒意図をあまり強くは規定していなかった。このことは、家で一人で酒を飲む行動は主に、内発的な動機づけによって起こることを意味していると思われる。

次に、友人と一緒に飲酒行動の予測モデルの検証においては、飲酒への意図は飲酒への態度と「いい気分・社交促進期待」「攻撃性増大期待」によって規定され、そして飲酒への態度は「いい気分・社交促進期待」「ストレス解消期待」「体調・気分悪化期待」「攻撃性増大期待」といった4つの期待によって規定されていることが分かった。また一回あたりの飲酒量は飲酒意図の他に「体調・気分悪化期待」によって規定され

ていることが分かった。家で一人で酒を飲む行動の時とは違い、飲酒意図、飲酒量は直接期待によって規定されており、また、態度もさまざまな期待によって規定されていることが分かった。態度と期待のどちらによって飲酒意図、飲酒行動がより大きく予測されるかということについては、家で一人で酒を飲む行動の時とは違い、態度だけではなく一部の期待も飲酒意図、飲酒行動を大きく予測していることが分かる。態度とともに、「いい気分・社交促進期待」が飲酒意図を大きく予測しているが、これは友人と一緒に酒を飲みたいという意図を誘発する要因として酒を飲むことについての感情（不快だー快い、不愉快だー愉快だ、嫌いー好き、退屈だーおもしろい）だけではなく、酒を飲んだ後の効果の期待・評価（酒を飲むと陽気になる、酒を飲むとより社会的になる）といった認知的な要因も存在することを示している。

また、友人と一緒に飲酒行動においては、友人に誘われる頻度が、飲酒意図を大きく規定しているという結果が出ていた。これは、友人が自分を酒に誘うということは、友人は自分が酒を飲むべきであるという規範を持っているということの裏付けであり、その規範に従う形で酒を飲みたいという意図が芽生えたのではないかと考えることが出来る。しかし、友人の主観的規範によっては飲酒意図は規定されていないことから考えても、以上のように規範に従う形で飲酒と断定してしまうのもどうかと思われる。むしろ、友人に酒を誘われることが外発的な動機づけ要因となって酒を飲みたいという意図を誘発すると考えた方が良さそうである。その中には、友人に酒を誘われたときに断れば、友人との仲にひびが入るという規範意識によって酒を飲まなければならないという意図が芽生える人もいれば、酒を控えようとしているにもかかわらず、友人から酒を誘われるとつい飲みたくなってしまふ人もいると思われる。また酒を飲むのが目的ではなく単に友人と遊びたいがために、友人から誘われると飲酒したいという人

もいるのではないかとと思われる。今後このあたりを明確にするために、友人との親和欲求や、友人に誘われるとつき合わなければならないという規範意識、友人に誘われるとどうしても酒を飲まなければならないという飲酒コントロール能力の欠如などを飲酒意図を規定する要因に含めて再調査する必要があると思われる。

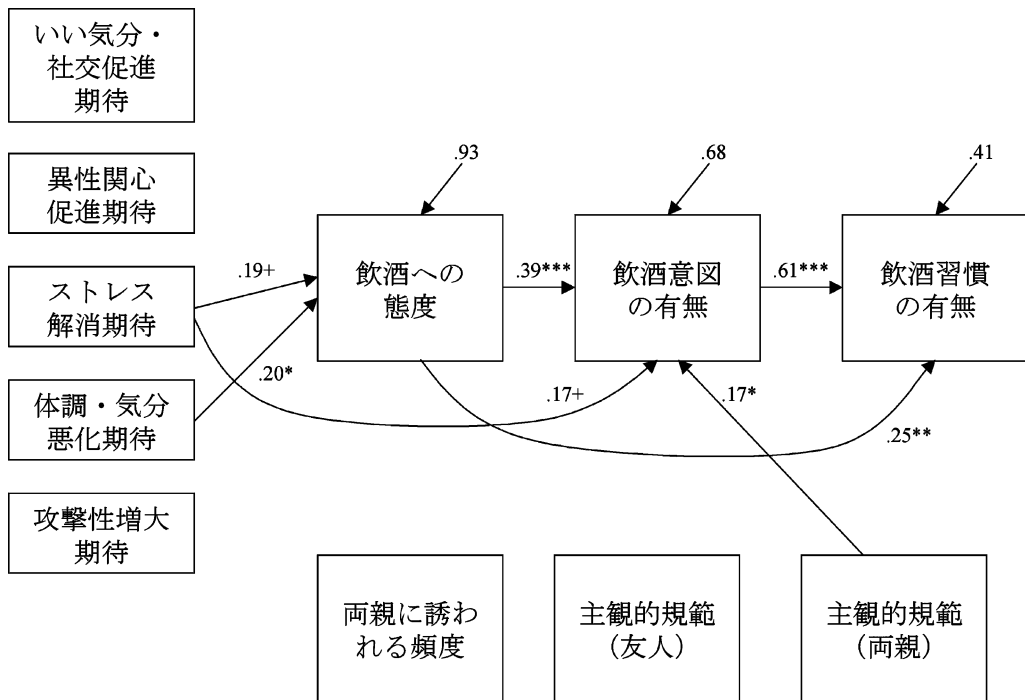
家で一人での飲酒行動と友人と一緒に飲酒行動の予測結果を比較すると、それぞれの飲酒行動に対する態度の7項目に対する評定値の平均を算出したところ、友人と一緒に飲酒行動に対する態度の評定値の平均 ($M=5.70$) のほうが、家で一人での飲酒行動に対する態度の評定値の平均 ($M=4.10$) よりも有意にポジティブであった ($t(104)=9.0$ ($p<.001$))。この理由としては、様々なことが考えられるが、一つには、やはり「いい気分・社交促進期待」の影響があげられるのではないかとと思われる。家で一人で酒を飲むことについてはポジティブな態度を持っていない人でも、「友人との仲が良くなる」「友人と楽しい時間を過ごせる」といった「いい気分・社交促進効果」を大きく期待している人は、その影響で、友人と一緒に酒を飲むことについてはポジティブな態度を持っているのではないかとと思われる。また、家で一人での飲酒行動と友人との飲酒行動では規範意識の働き方に違いがあるのではないかとと思われる。家で一人での飲酒行動においては、両親の主観的規範が飲酒量を抑えたり、飲酒習慣の生成を抑えるなど、飲酒を抑制させる働きを持つ規範が存在するが、友人と一緒に飲酒行動においては、規範意識は飲酒を抑制させる方向では働いていないと思われる。むしろ、友人に酒を誘われると付き合わなければならないといった規範意識など、飲酒を促進させる規範が存在するのではないかと考えられる。

今回の調査では、家で一人で飲酒する習慣がない人が全回答者の約半数 (105人中53名) を占めていたが、「家で一人で飲酒する習慣があるかないか」を、仮定した行動予測モデル (図1)

を用いて予測する事を試みた。「飲酒意図」の変数として「家で一人で飲酒したいと思ったことがあるかどうか (0 or 1)」を、また「飲酒行動」の変数として「家で一人で飲酒したことがあるかどうか (0 or 1)」を用いてパス解析を行ったところ、家で一人での飲酒習慣の有無 (飲酒意図, 頻度の有無) は、飲酒への態度, 両親の主観的規範, ストレス解消期待によって予測可能であるという結果が得られた (図 4)。飲酒への態度や期待に加えて両親の主観的規範によっても飲酒習慣の有無が規定されていたが、これは、家で飲酒する習慣が有るか無いかは、自分自身が酒を飲むことについてどのように思っているかだけでなく、両親を含む周囲の人が家で酒を飲むことについてどのように考えているかによっても決定づけられていることを意味していると思われる。つまり、たとえ家で一人で飲酒をする事に対して望ましい態度を持っている人

でも、両親から家で酒を飲むべきではないというネガティブな規範を感じている人は、酒を家で一人で飲む習慣がつかず、また一人で飲酒をする事に対してあまり望ましく思っていない人でも、両親が家で酒を飲むことは望ましいと考えていると認識しているならば、家で一人で酒を飲むことがあるのではないかと思われる。

続いて、一人で飲酒する習慣のある人と習慣のない人を区別し、それぞれ別に、「友人と一緒に飲酒する行動」の予測を仮定した行動モデルを用いて行い、比較検討することを試みた。その結果 (図 5, 6)、一人で飲酒する習慣のある人では飲酒意図は主に「いい気分・社交促進」効果のポジティブな期待や飲酒へのポジティブな態度によって規定され、「友人に酒を誘われる頻度」にはあまり強く規定されていなかったのに対し、一人で飲酒する習慣の無い人では飲酒意図は「友人に酒を誘われる頻度」によってのみ



* $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

図 4. 家で一人で飲酒する習慣の有無についての予測モデルのパス解析結果

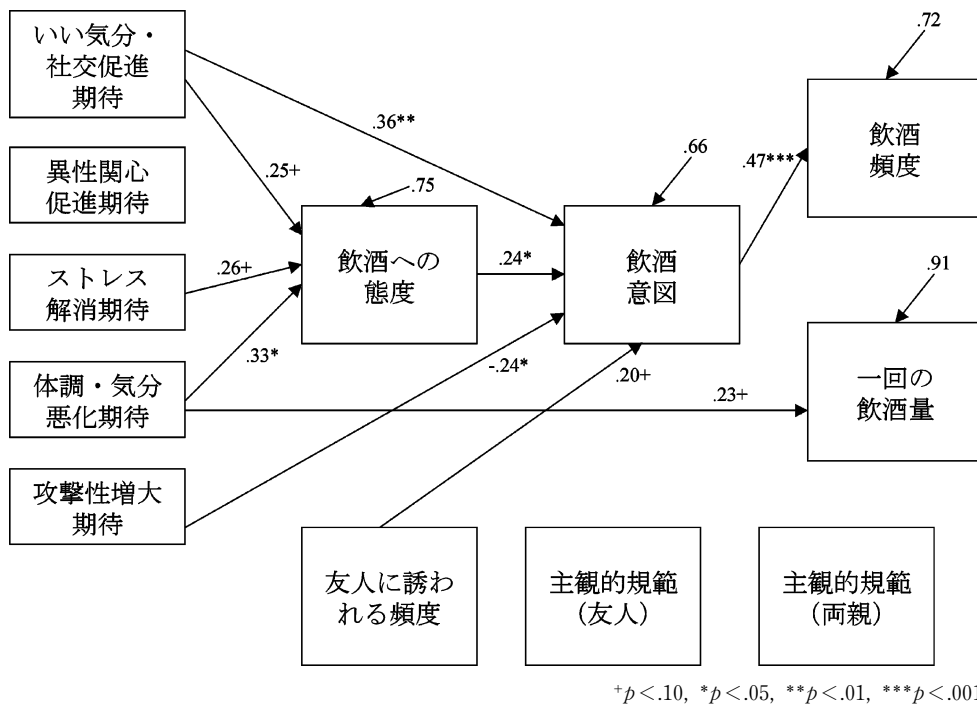


図5. 友人と一緒に飲酒行動予測モデルのパス解析結果 (家で一人で飲酒する習慣のある人)

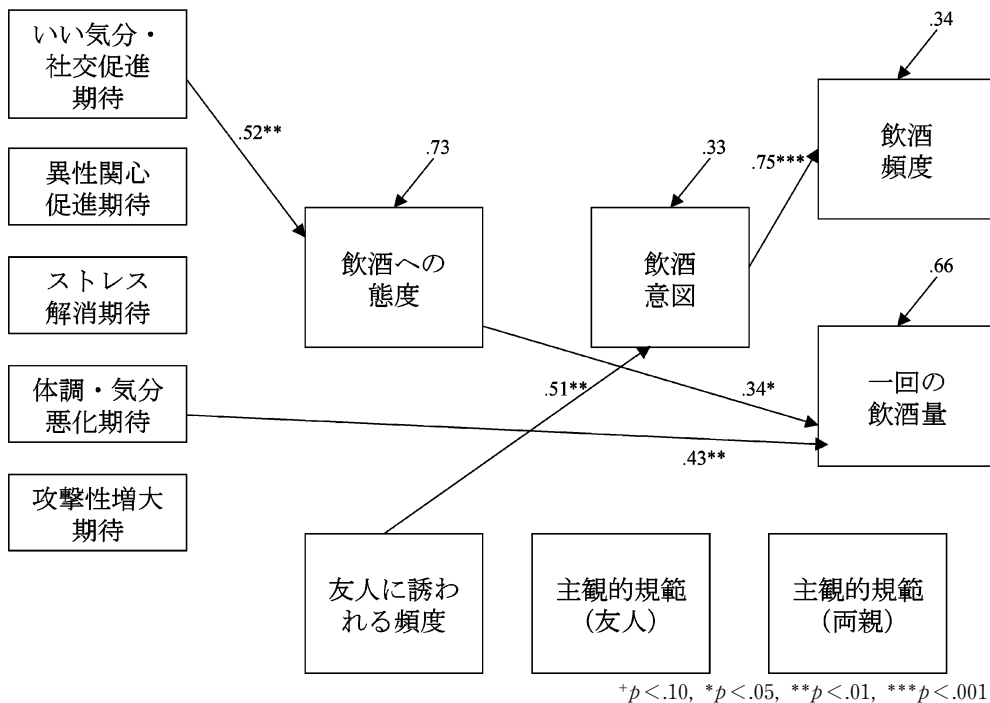


図6. 友人と一緒に飲酒行動予測モデルのパス解析結果 (家で一人で飲酒する習慣の無い人)

規定されていた。このことは、一人で飲酒する習慣のある人は主に内発的に動機づけられて友人と一緒に酒を飲んでいるのに対し、一人で飲酒する習慣の無い人は主に外発的に動機づけられて友人と一緒に酒を飲んでいるということを示しているのではないかと考えられる。

本研究は、大学生・大学院生 105 名（平均年齢 21.4 歳，19～28 歳）を対象として調査を行ったが、社会人の人や高齢者の人を対象として調査を行えば、結果はまた違ってくるのではないかと考えられる。本調査で対象とした、大学生、大学院生の飲酒行動の特徴としては、比較的一人では飲酒する習慣を持たない人が多かったことがあげられる。この原因としては、年齢層が若い（未成年者も含まれている）ことや、大学生の経済状態などが考えられる。本調査の対象者の中でも大学生よりは大学院生の方が一人で飲酒する習慣のある人の割合が高く、このことから年齢が一人での飲酒習慣の有無と関係していることが分かる。日本では、法律によって 20 歳未満の人の飲酒は禁じられているため、20 歳未満の人が飲酒すると違法になることも原因の一つであると考えられる。実際、20 歳前後の人の中には、一人で飲酒しない理由として、健康に悪いからとか、体の具合が悪くなるからといった理由ではなく、単に家で一人で飲んだことがないからという理由を挙げる人も数多いのではないかと考えられる。30 歳以上の人を対象にすれば、一人で飲酒する習慣のある人と無い人の飲酒に対する意識の差がよりはっきりと結果に現れる可能性が十分あると思われる。また社会人の人と高齢者の人はそれぞれ飲酒に対する意識において大学生の人にはない側面を持っているのではないかと考えられる。社会人の人は、大学生と比べると人と酒を飲みに行くことはかなり多いと思われる。その中には、会社の接待や上司とのつきあいによる飲酒なども多く含まれていると思われ、そのため飲酒についての規範に関して大学生よりはより敏感なのではないかと考えられる。一方、高齢者の人は、体の健康

について大学生や若い社会人の人と比べてより関心があるのではないかと考えられる。実際、大学生や若い社会人の人と比べると、高齢者の人は体の健康を考え、一度に多量の酒を飲むような無茶な飲み方はあまりしないのではないかと考えられる。今後、社会人や高齢者の人を対象に調査を行い、飲酒についての意識（期待、態度、規範意識）が大学生とどのように違うか、そして飲酒についての意識によって飲酒行動がどのように規定されているか、その規定のされ方は大学生とどのように違うかを検討することが必要であると思われる。

最後に、本研究で飲酒行動の予測に用いた TRA モデルは、様々な行動の予測に使われており、その中には数多くの健康に関する行動や安全行動が含まれている（例：喫煙行動、避妊行動、シートベルト着用行動、歯の管理、エイズの予防行動（Parker, Stradling, & Manstead, 1996²⁴⁾ より引用）。このような健康や安全に関する行動の予測に TRA モデルが用いられているのは、TRA モデルがこれらの健康や安全に関して問題となる行動をとる原因となっている心理学的要因を解明するのに有用でまた簡便な方法であるためであると思われる。そして、これらの研究の最終目的は、TRA モデルによる予測で得られた心理学的要因を用いて、今後の健康、安全教育に役立てることにある。TRA モデルの提唱者である Fishbein は、TRA モデルの究極の目的は、問題行動を効率的に解決させる教育に導くガイドラインを提供することであると述べている（In Terry, Gallois, & McCamish, 1993 — Parker, Stradling, & Manstead, 1996²⁴⁾ より引用）。「酒は百薬の長」と言われるように、酒には望ましい効果があるが、一方酒は、つきあい方を誤れば望ましくない結果を引き起こすものである。アルコール依存症、多量の飲酒、飲酒運転、飲酒による事故、飲酒後の暴力、飲酒によるセルフ・ハンディキャッピング等々問題飲酒行動はあげればきりが無い。本調査の目的は、純粹に飲酒行動がど

のような心理学的要因によって予測できるかを調べることであったが、今後、この調査の結果から得られた心理学的要因を操作することによって問題飲酒行動を予防することが可能かどうかを検証することが必要であると思われる。また、飲酒行動の問題的な側面に絞り、TRAモデルを用いて問題飲酒行動を規定している心理学的要因を探求する事も必要ではないかと思われる。

参考文献

- 1) Goldman, M.S., Brown, S.A., Christiansen, B.A., et al. Expectancy theory: Thinking about drinking. In H.T. Blane, & K.E. Leonard (Eds.), *Psychological theories of drinking and alcoholism* (pp.181-226). Guilford Press, New York, U.S.A., 1987.
- 2) Leigh, B.C. In search of the seven dwarves: Issues of measurement and meaning in alcohol expectancy research. *Psychological Bulletin* 105(3), 361-373, 1989.
- 3) Grube, J.W. & Morgan, M. Attitude-social support interactions: Contingent consistency effects in the prediction of adolescent smoking, drinking, and drug use. *Social Psychology Quarterly* Vol. 53(4), 329-339, 1990.
- 4) Cox, W.M. & Klinger, E. A motivational model of alcohol use. *Journal of Abnormal Psychology* 97(2), 168-180, 1988.
- 5) Christiansen, B.A., Smith, G.T., Roehling, P.V., et al. Using alcohol expectancies to predict adolescent drinking behavior after one year. *Journal of Consulting & Clinical Psychology* 57(1), 93-99, 1989.
- 6) Maisto, S.A., Connors, G.J. & Sachs, P.R. Expectation as a mediator in alcohol intoxication: A reference level model. *Cognitive Therapy & Research* 5(1), 1-18, 1981.
- 7) Leigh, B.C. Attitudes and expectancies as predictors of drinking habits: A comparison of three scales. *Journal of Studies on Alcohol* Vol. 50(5), 432-440, 1989.
- 8) Leigh, B.C. & Stacy, A.W. Alcohol outcome expectancies: Scale construction and predictive utility in higher order confirmatory models. *Psychological Assessment* 5(2), 216-229, 1993.
- 9) Brown, S.A., Goldman, M.S. & Christiansen, B.A. Do alcohol expectancies mediate drinking patterns of adults? *Journal of Consulting & Clinical Psychology* 53(4), 512-519, 1985.
- 10) 桜井茂雄. 飲酒理由, 飲酒効果と, 飲酒関連行動, アルコール依存傾向との関連. 筑波大学心理学研究 19, 111-128, 1997.
- 11) Stacy, A.W., Widaman, K.F. & Marlatt, G.A. Expectancy models of alcohol use. *Journal of Personality & Social Psychology*. Vol. 58(5), 918-928, 1990.
- 12) Leigh, B.C. Evaluations of alcohol expectancies: Do they add to prediction of drinking patterns? *Psychology of Addictive Behaviors*. Vol. 1(3), 135-139, 1987.
- 13) Ajzen, I. & Fishbein, M. (Eds). *Understanding Attitudes and Predicting Social Behaviors*. Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ, U.S.A., 1980.
- 14) Petty, R.E. & Cacioppo, J.T. Communication and persuasion: Central and peripheral routes to attitude change. Springer-Verlag, New York, U.S.A., 1986.
- 15) Kilty, K.M. Attitudinal and normative variables as predictors of drinking behavior. *Journal of Studies on Alcohol*. Vol. 39(7), 1178-1194, 1978.
- 16) McCarty, D., Morrison, S. & Mills, K.C. Attitudes, beliefs and alcohol use: An analysis of relationships. *Journal of Studies on Alcohol*. Vol. 44(2), 328-341,

- 1983.
- 17) Simons, J. & Carey, K.B. A structural analysis of attitudes toward alcohol and marijuana use. *Personality & Social Psychology Bulletin*. Vol. 24(7), 727-735, 1998.
- 18) Towberman, D.B. & McDonald, R.M. Dimensions of adolescent self-concept associated with substance use. *Journal of Drug Issues*. Vol. 23(3), 525-533, 1993.
- 19) Wills, T.A., DuHamel, K. & Vaccaro, D. Activity and mood temperament as predictors of adolescent substance use: Test of a self-regulation mediational model. *Journal of Personality & Social Psychology*. Vol. 68(5), 901-916, 1995.
- 20) Wall, A., Hinson, R.E. & McKee, S.A. Alcohol outcome expectancies, attitudes toward drinking and the theory of planned behavior. *Journal of Studies on Alcohol*. Vol. 59(4), 409-419, 1998.
- 21) Baumeister, R.F., Heatherton, T.F., Tice, D.M. *Losing control: How and why people fail at self-regulation*. Academic Press, San Diego, CA, U.S.A., 1994.
- 22) 栗原 久. *心・身体・薬*. 山手書房新社, 1992.
- 23) Fishbein, M. & Ajzen, I. *Belief, attitude, intention, and behavior: An introduction to theory and research*. Addison-Wesley, Boston, MA, 1975.
- 24) Parker, D., Stradling, S.G. & Manstead, A.S.R. Modifying beliefs and attitudes to exceeding the speed limit: An intervention study based on the theory of planned behavior. *Journal of Applied Social Psychology*. Vol. 26(1), 1-19, 1996.

**Psychological Factors for Predicting University Students’
Drinking Behavior : Alcohol Outcome Expectancies,
Attitudes toward Drinking, and Subjective Norms**

Michihiko KANACHI

(Faculty of Human Health Science, Hachinohe University)

The purpose of this study was to investigate how university students’ drinking behaviors can be predicted by psychological factors. Based on the theory of reasoned action (Ajzen & Fishbein, 1980), we hypothesized alcohol outcome expectancies, alcohol drinking attitudes and subjective norms on drinking behaviors as core psychological predictors of drinking behaviors. This study assessed two types of drinking: “drinking alone at home” and “drinking with friends”. Undergraduates and graduate students (49 males and 56 females) completed the questionnaire on drinking behavior. The result of path analysis almost supported the hypothesized models based on the theory of reasoned action in both situations of drinking. The frequency of intending to drink alone at home was mainly related with an emotional factor (attitudes), not so much with a cognitive factor (outcome expectancies) and an external factor (subjective norms). The frequency of intending to drink with friends was related with all of three factors. Further analysis showed that people who often drink alone at home were motivated to drink with friends by internal factors (outcome expectancies and attitudes) whereas people who rarely drink alone at home were motivated by an external factor (subjective norms).

Key words : alcohol outcome expectancy, attitude, subjective norm